

鱗翅妄想

市川 浩

春先甘藍^{キャベツ}の葉に産み附けける蝶の卵、孵化して蛆蟲となり、數回脱皮して青蟲となる。この間只管甘藍の葉の上において且つ之を餌として這ひ回る。當に二次元生物の典型なり。他の鱗翅目たる蛾にしても、例へば蠶蛾の幼蟲毛蠶^{けご}は甘藍の代りに専ら桑の葉をば生活の空間とするも、その活動の二次元たる、些かも蝶の場合に異ならず。彼等には高さの次元の存在意味をなさず、時に葉より落つる有りと雖も、幼蟲は之を三次元の移動とは全く知覺すべくもなからまし。

是我等人間三次元空間に在るも更に上位の次元世界の眺望はえ得ざると同型なり。但し人間は二次元世界を三次元空間の一部として見るにより、類推して四次元世界の想像可能なり。扉を開く契機はメビウスの帶なるらむ。帶を一拈^{ひね}りしてその兩端を接ぐに、その面上を這ふ青蟲、全くの二次元移動によりて、難なく三次元運動たる表裏兩面の往復を果す。三次元生物の人間も何らかの空間の拈りを感じせば四次元空間を實感すべし。思ひ起す、釋尊靈山會上に拈華すと。その意味する所三次元空間の「拈り」を感知し、そこに廣ぐる四次元世界を垣間見るに非ずや。傍らの慧可迦葉尊者亦同じ境地なり。けめば思はず微笑し、釋尊直ちに事情を諒解し、正法眼藏を以て皆傳す。妄想の第一なり。

然るに一方この青蟲蛹となりて、或は絲を紡ぎ出して繭を作り、斷食の狀況にて過ぐすこと數日、遂に羽化して蝶蛾となりて空を飛ぶに至る。二次元より三次元の世界へ移行し、嘗ての生活の平面、甘藍の葉は球體の表面なりけるを知るのみならず、メビウスの帶の謎も解く。かゝる變態の神祕、當に天地の理法茲に極むと言ふべく、將た又仄聞するの現代物理學に於ける多次元量子空間をも我等凡愚に實物にて例示するが如し。

學匠愛甲理事長長年の佛道修行にて遂に空中浮揚^{フライング}を會得するの次第、電網に御發表あり。空中浮揚は是まで話には聞けども見ることなく、なかなか信じ難かりけるも、之を讀みて蛹の蝶となるに同じく、通常の次元にては至難と思へる空中浮揚も、上位の次元に立たば蝶の舞ふが如く極く自然容易なるべしと半解す。さすれば佛道の荒行蛹の食物無攝取にも當るらむ。

馬術の極意は「鞍上人無く鞍下馬なし」と。鞍といふ、これまた現代相對論にも登場する縦横に曲率正反對の曲面を有する物具を介して人馬の修行、遂にこの格言に至るなり。嘗て聞く、大兵の馬術家の、偶然傷を負ひたるを背負ひて病院へ運びたる人、その意外の輕きに驚けりと。身を四次元に置く空中浮揚にやあらむ。學匠にして乗馬を始め給はば、日ならずして「鞍上人無き」境地に達すべし。

最近の氷上圖形滑走^{フィギュアスケート}の羽生選手や體操の白井選手等による華麗なる廻轉跳躍など異次元の演技あるを見るにつけ、誕生後百五十萬年を経て、人類漸く多次元世界への進出を開始せる標ならずやと第二の妄想を逞しうす。

(平成二十九年一月十二日受附)